☆そういう日☆

睦月☆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
☆そういう日☆

【Ｎコード】
Ｎ４５６５Ｄ

【作者名】
睦月☆

【あらすじ】
中学生、柚実夏。クラスメートの直美。その彼氏、健一。柚実夏はある日、ある事がきっかけで、恋人二人の恋愛に入れられてしまう。柚実夏はどうするの？ある事って何？どうぞ、表紙を開いてください☆

（前書き）

この作品はだいぶ前から構想を練っていて、暖めておいたものです。恋愛物は初めてなので、読みにくいかもですが、どうぞ最後までお付き合いください！

プロローグ

教室の床に、飛び散る鮮血。
女子の悲鳴。
男子の怒鳴り声。
呆然と、立ち尽くした。
となりのやつは、興味なさそうに軽蔑の目でその子を見ていた・・・・。

なんにも、できなかった。
あたしの・・・・・・せい・・・・？
「やめろぉ！！」
誰かのその声で、はっと我に返った。
その子は血だらけの手首になおも、はさみを当てようとしていた。
「死なせてぇぇ！！」
「おさえろぉ！！」
その子の声と、男子数人の声が、入り混じってあたしの耳の中に侵入してきた。
あたしは慌てて、その子を押さえに人だかりに飛び込んでいった。

１１月２６日

それは、突然だった。
朝から変だった。

あの子の様子。
いきなり泣き出したり、グズグズメソメソ・・・。
あの子らしくなかった。
小耳に挟んだところ、彼氏と何かあったって・・・・。
その彼氏ってのが、となりにいた、あいつ。
あいつのなまえは、けんいち。
つかはら、けんいち。塚原、健一。
朝から変だった。
あいつの様子。
あたしに、異様に話しかけてみたり。
お互いに、そっぽむいたみたいに。変だった。
けんか、したんだろ。ぐらいにしか思わなかった。

掃除の、時間。
また話しかけてきた健一を、あたしが相手してやってると、
どこからともなく、
「もう・・・死にたい」
というつぶやきが聞こえてきた。
あの子だった。なおみだった。
あさくさ、なおみ。朝草、直美。
それが、あの子の名前。
あたしは冗談で、ほんとに冗談で、こう言ったんだ。
「ほらぁ、彼女が死にたいっていってるよぉ」
そしたら、健一の答えは、あまりにも、残酷な答え。

「・・・・死にたい奴は死ねばいい・・・・」

それだけいって、あとはまた、
あたしと、何事もなかったかのように話し始めたんだ。
あたしは、あっけに取られて、何も言えなかった。
だって、健一はそんな事、言う人じゃなかったから。
その健一の、残酷な考えを聞いて、直美はこちらをチラリと見た。
ようなきがする。
ともかく、直美はおもむろにふでばこからはさみを取り出し、
片方の刃を小刀みたいに持って、
手首に、食い込ませた、と、見てた人が言っていた。
手首に当てたはさみと、直美の血管が触れ合った瞬間に、
みんなは気づいた。

教室の床に、飛び散る鮮血。
女子の悲鳴。
男子の怒鳴り声。
呆然と、立ち尽くした。
となりのやつは、興味なさそうに軽蔑の目でその子を見ていた・・・・。
なんにも、できなかった。
あたしの・・・・・・せい・・・・？
「やめろぉ！！」
誰かのその声で、はっと我に返った。
その子は血だらけの手首になおも、はさみを当てようとしていた。

「死なせてぇぇ！！」
「おさえろぉ！！」
その子の声と、男子数人の声が、入り混じってあたしの耳の中に侵入してきた。
あたしは慌てて、その子を押さえに人だかりに飛び込んでいった。
血のついたはさみを振り回すもんで、みんな怖がって近づけない。
もう、ヒステリー状態。
ああ、あたしだって、こわかったよ。できることなら、健一の隣で見ていたかった。
でも、もしかしたら、あたしのあの冗談で・・・あたしのせいで・・・
そう考えると高みの見物ってワケにはいかない。
はがいじめに、しようと思った。
これ以上怪我させずに、後ろから、忍び寄って、押さえようと思った。
だけどね、ああ・・・。ごめんね、直美。
あんた、ちょっぴりあばれすぎてたんだよ。
刃物、持ってるしね。
直美のはさみはあたしの左腕を掠った。
左腕にスゥッと、涼しい変な感触がした。
ちょっと、腕が切れた。そこから、血が滲んだ。
もう、これ以上ほっといたら周りの人が怪我するようで、
手っ取り早く終わらせたかった。
ホントはあんな事したくなかった。
でも、あたしはとっさに、直美のお腹に拳を食い込ませた。
「・・・っくはぁっ！！」
苦しそうな声が、彼女ののどから出てきた。
同時にあたしははさみを取り上げて、傷のついた手首を気遣いながら、

両手を背中の方にねじり上げて、後ろでしっかりと押さえた。
あたしも、直美も、直美の血で、血だらけだった。
「げほぉっ！！げほっげほっげほっ！！」
苦しそうな咳をしながら、直美はあたしをギロッと睨んだ。
「ゴメンネ、直美。でも、ああするしかなかったんだよ。しょうがないじゃん」
直美の表情は少しだけ和らいだ。
「直美、ダイジョウブ！？」
すぐさま大勢の女子が駆け寄ってきた。
あたしは、そのこたちに直美を任せて、
ズキズキと痛む左腕を押さえながら、保健室へと向かった。

教室を出てしばらくいくと、健一が追ってきた。
「ゆみか！！大丈夫か！？」
「・・・・アタシは、だいじょぶだから・・・」
「血が出てるぞ！！」
「知ってるし・・・」
「でも・・・」
「いいから、直美の方にいって上げれば？　精神的に不安定だし」
正直言って、あたしはあんまり直美は好きじゃないけど、
このときばかりは直美を気遣った。そうしないと健一が離れてくれそうになかった。
「あ、じゃあ、俺が直美を保健室に連れてくよ！」
「そうしてあげて・・・」
走り去っていく健一の姿をあたしは、ちょっぴり寂しい気持ちで眺めていた。

保健室では、直美とあたしが並んで治療を受けて、

並んでこっぴどく叱られた。
先生の言い分は、
あたしは「女の子なのに、男の子や先生に任せたり」しないで、
ひとだかりに「自分で飛び込んで行って、しかも、お腹殴るなんて」
そんな荒療治はないといいたいらしい。
だって・・・・だってだって・・・しょうがないじゃん・・・・。

保健室から出ると、すぐのところで健一が待っていた。
「直美なら、心配ないよ。傷は深いけど、命に別状なしだって」
そう伝えた後、あたしはいやみたっぷりにこう言った。
「誰かさんは直美さんが死んだ方がましって考えてるかもしれないけどね」
健一は何のことだ？　みたいな顔しながら、首をかしげた。
「いや、直美は自業自得だけど、お前・・・ダイジョブか？」
なに、こいつ。本気で心配してんのぉ？
「えぇ？　別に大丈夫だけど・・・」
「ほら、なんか、直美がああいうことして、ゆみかが怪我したのって、俺のせいかなって、考えてたんだよ」
自分であんなこと言っといて、何、それ？
「ううん、別にそういうわけじゃないから、ほら、どいてよ」
「あ、ごめん」
あたしは健一を押しのけて、どんどん歩いていった。
「ゆみか、待てよ」
それでもあいつはしつこく追いかけてきた。
「おい！」
「アタシのことなんかより、直美のトコに行ってあげたら？」
あたしは振り返りながら、きつい口調で言った。

「あ・・・・ああ・・。じゃあ、そうする」
健一はあたしの口調に面食らったのか、
さっさと後ろを向いて歩いていってしまった。
言ってしまってから、後悔する事って・・・あるよね。

１１月２７日

翌日。
直美は腕に包帯を巻いて、登校してきた。
昨日の、あの衝動的な行動は、やっぱり健一のあの一言のせいだったらしい。
健一も、けんかして、いらいらしていたそうだ。
死にたいなんていって、注目を集めたいだけなんだろ。
そう思って、わざとあんな事を言ったんだ。
それにしても、二人とも、もう少し仲良く出来ないのかなぁ・・・。
遠くから、声が聞こえてきた。
「ねえ直美、そんな腕で、あんたテスト受けられんの？」
「だいじょうぶだよ。右手で書けるじゃん」
そうだった。
あさっては期末テストだ。
勉強、めんどくさいなぁ・・・。

１１月２９日

期末テスト、一日目。
不安はけっこうあったけど、まぁなんとか無事終了。
はぁ・・・。数学、まちがったよなぁ・・・。

１１月３０日

３校時終了。
余裕っぽく見えるかもしれないけど、
あたしは本を読んでた。ホラー小説。
スッ、と何気なく健一はあたしの隣の窓に近づいた。
「おまえ、余裕じゃん」
はは、言うと思った。
「別に」
「おれは、もうやべぇよ。肝心なとこミスったから」
「ふぅん」
過ぎた事はどうでもよくね？
「ところであんた、こんな所にいて、直美はどうすんの？」
あたしは本を読みたかったから、健一を離れさせようと試みた。
「べつに」
結果は失敗だった。
そのうち話題はあたしの髪の毛に移った。
「その天パー、俺のワックスで伸びるかな？」
伸ばしてどうすんの・・・？
「でも、この前伸びなかったじゃん」
一ヶ月ぐらい前、せがまれてワックスを髪に塗ってみたけど、
効果はゼロだった。

我がクルクルは無敵なり！・・・なんてね。
「いや、俺が持ってるもう一個の方なら・・・」
あんた、何がしたいんだ？
「あぁ、そう。じゃあまた機会があったら」
あたしは適当に返事を返した。
「・・・・おれさ・・・」
「おれ、お前のこのクルクルがいいと思う」
・・・はぁ？　なにいきなり？　なにこいつ？
「お前の天パーが好きだなぁ・・・」
あたしはちょっと心拍数が上がるのが分かった。
健一からすきって言葉が出るなんて・・・。
あたしは慌ててごまかそうとした。
「じゃあ直美は？」
我ながら変な質問だと思った。
好きに決まってんじゃん。
「あいつ？・・・普通」
あたしは思わずふきだしそうになった。
直美、しっかりしろよ！髪の毛に負けてるぞってね。
「でもさ。天パー天パーって、小学校からいじめられてたんだよねぇ」
事実だった。男子にはしょっちゅう「天パーのクセに！」とかって言われたし。
でも、そうやってからかわれたのはあたしの性格、気が強いってこともあるかも。
「例えば誰に？」
「ん？そうだなぁ、このクラスだったら・・・」
あいつでしょ、それからあいつに、あそこにいるグループとか・・・と、順番に指を差しながら教えた。
「・・・――――――・・・」
「・・・・え？　・・・」

一気に体中が熱くなるのが分かった。
聞き返したけど、ちゃんと聞こえてた。
守ってやるよ。おれが。
そう言った。
あたしはまたごまかすように、
「そういうことは直美にいってやればぁ？」
そして、その話題を断ち切るように言った。
「次、英語のだねぇ」
「ああ。Ｍｓ．ｙｕｍｉｋａ　ｉｓ　ｍｙ　ｆｒｉｅｎｄ．」
健一は少し得意そうに言った。
「え？　あたしって健一の友達だったっけ？」
「えぇ？　じゃあゆみかは俺の事どう思ってたわけ？」
あたしはちょっと考えて、ブラックジョークをひとつ。
「ん～・・・クラスメート！！」
「ひでぇひでぇ！！！」
「わかったよ。じゃあ、今からあたしたちともだちね！」
言い終わらないうちにチャイムが鳴った。
「グッドラック！」
互いに言い合って、別れた。
「・・・ｍｒ．ｋｅｎｉｃｈｉ　ｉｓ　ｍｙ　ｆｒｉｅｎｄ・・・ｈｅ　ｉｓ　ｖｅｒｙ　ｋｉｎｄ．」
一人で、つぶやいた。

英語テスト、終了。
結構難しい所もあったけど、まぁ、提出しちゃったもんはしょうがない。
「ゆみかぁ～・・・」
「直美・・・？　どしたの？」

直美からあたしに話しかけてくるなんて、滅多にない事だ。
「さっきさぁ・・・・・」
言いかけて直美は他の人の目を気にするように、
「ちょっと・・・・こっち来て」
と言った。
そのまま教室を出て、階段のそばの、ちょっと広くなってるところに連れてかれた。
「で？　どうしたって？」
「さっき、健一と何はなしてたの？」
え・・・？見てたの・・・・？
「何って・・・・？　何？」
「なんか、英語のテストが始まる前の休み時間。何か話してたじゃん」
あたしは、健一が恥ずかしそうにつぶやいたあの言葉を思い出した。
トクントクントクン・・・。
心音がどんどん速くなっていく。
あたしは得意の演技で切り抜けようと思った。
「別に・・・。クスクスクス・・・。」
顔を下に向けてさもおかしそうに笑う。
「何？　なに笑ってんの？」
「馬鹿みたいな話だよぉ。クスクスクス・・・」
「何なに？　教えてよ。」
「健一の持ってるワックスで、これが伸びるかっていう話」
あたしは髪の毛を人差し指と親指で少しつまんで持ち上げて見せた。
「何それぇ～？ばっかみたい」
「だから言ったじゃん。馬鹿みたいな話だよって」
ひっかかった。ウソじゃないしぃ～。
なぜほんとのこと言わないかっていうと、直美って、なんていうか・・・・。
意地悪っていうの？　なんか、悪い奴らの仲間っていう感じ。

ホントの事なんていったら、きっと明日には、あたし、先輩たちにしめられちゃうよ。
「まぁ、いいや」
直美が言った。
「あのね、このごろ健一冷たくって・・・。ウチを避けてるっていうか・・・」
目の前でリストカットされたらそうなるでしょ。
「それで、なんかこの頃うちと話してる時間と、ゆみかと話してる時間が同じぐらいなの」
まぢで?!あんたらやばくない？　あっ、そういえば、直美髪の毛にも負けてた・・・。
「しかも、ウチよりゆみかといる方が楽しそうで・・・」
「そうかなぁ？」
「そうなの！　だから、できるだけ健一と話さないで欲しいんだけど・・・」
ははぁ・・・。そう来るか。
「いいよ。別に。じゃあ、健一の事は完全にシカトってことで！」
「あぁぁ！　違うの違うの。いきなり話さなくなったら何か言われるでしょ」
「ああそうか」
あんたとしては自分が手出ししたって感づかれるのが嫌なわけね。
「だから、ゆみかからは話しかけないで欲しいの。向こうから話しかけたときは相手してくれる？」
「わかった。別にいいよ。じゃ、あたし給食当番だから」
「うん。ありがと」
そしてあたしは教室に戻って、自分の分担を黙々とこなした。

１２月４日

３時間目。理科。
「キリーツ、キヲツケ、レイ」
「アリガトーゴザイマシタァー」
「今日はノート提出だぞぉ。名前書いてここ置いとけ」
やばっ！　名前書かなきゃいけないの？　あたしかいてないし。
油性ペン油性ペン・・・。
あれ？　ない？　どこいったぁ～？
「ゆみか、行こうよ」
「ごめん。先行ってて」
「わかった」
ないなぁ・・・？　どこいったんだろう？
あぁ、もぉ～！　カラーペンでいいよねぇ・・・。
米・・・倉・・・柚・・実・・夏
「はい！　先生！」
あぁ～もう！　一人になっちゃったぁ～・・・。
・・・・あ。一人じゃなかった。健一・・・・。
授業の質問してたんだな。
あ。次の授業、美術じゃね？　やっば、移動教室じゃん！
急ごう・・・。
「ゆみかぁ！！」
おおっと・・・。これは困ったぞ。
後ろから健一がついてきた。
「一緒に教室帰ろうぜ！」
「えぇ～っと・・・？」
健一はあたしの一歩先を歩き出した。
直美に言われた事を思い出して、少しずつ間を広げていった。
と、健一がいきなり振り向いた。
「どうした？　隣来いよ」

ええぇ～っと？　それはダメかも。
「やぁだよぉ～！！　健一の隣なんて」
「ひでぇ～！」
きゃはははは、我ながらかわいそうな事言ったかも？
あ、こんなことしてるばぁいじゃない！！そろそろチャイム鳴るんじゃねぇ？
あたしは小走りになった。健一、ちんたらすんなよ！！
追い越そうとして横に並んだ時、
「あれ？そんな事言っといて結局となりきてんじゃん」
カァァァァッと、顔に血がのぼってきた。
「そんなんじゃないよ！　追い越そうとしただけ！」
かまわず追い越そうとすると、
今度はこいつ、おんなじスピードでついて来た。
横にぴったりと並んで。
「来ないでよ！」
「なんだよ。ただ走りたくなっただけだよ」
むぅ・・・。何このガキ？
しょうがないからあたしはスピードを緩めた。
するとまたぴったりと同じスピードになる。
あんたのその無責任な行動で、あたしが後で直美に何されるかわかんないの？
あ～あ、もう・・・。
「あ～あ、あたし、なんだかいきなり走り出したくなっちゃった・・・」
といって構えて、
「なっ！！」
と言いながら全力で走り出す。
「あ、俺も走りたくなっちゃった」
と言ってあいつも走り出す。
そうこうしているうちに階段を3階まで駆けあがり、

教室に着いた。と、健一はスッとあたしを追い越して先に教室に入っていった。
彼女がいるからでしょ？分かってるんだから・・・。
かといって、このまま教室に入ったら直美になんて言われるかわかんないけど・・・。
あたしはそのまま停止して、２０秒ほど差をつけてから教室に入った。
美術の道具を整えて、一人で美術室に向かう孤独さを、
さっきまでの楽しい競争がより一層引き立てていた。
キーンコーンカーンコォーン――――――
ああ、こうしちゃいられない・・・。
早く行かなくっちゃ・・・。
あたしは半ばチャイムにせかされるように走った。
さっきのように、全力で。
今度は、孤独（ひとり）りで。

１２月７日

「つかさぁ～、けんか売ってんの？」
は？なにがですか？
開口一番に何言ってんの？
「なにが？」
「とぼけないでよ」
「そう、見せ付けられてるみたいで、やだ」
はぁ・・・・。疲れる・・・。
「別に。向こうから来ただけだし」
「あのね、自分から健一の所行ったでしょ？」

「それは何でって聞いてるの」
ああ、もう。これじゃ多勢に無勢でしょ。
「そりゃ、健一が分かんないっつってた問題、分かったからでしょ」
「あぁ、そう。まあとにかく、健一の所、行かないでくれない？」
「分かってるよ。これからはもう絶対話さないから」
「分かってないじゃん・・・・」
「何が？」
「二人で仲良く話してんじゃん！」
「別に仲良くなんか話してないし、みんな怖いよ？」
「人の彼氏取らないでくれないかなぁ？」
「取ってない取ってない。もうやだよみんな怖いし・・・。もう怖すぎて泣きそう・・・・」
あたしは嘘だと分かるような嘘泣きをした。
「つか、直美の方がよっぽど泣きそうだから」
「そうそう。誰かが直美の彼氏の所に行っちゃうから」
あぁ・・・うざっ！
「もう。それはただ忘れてただけっていってんじゃん」
「よく忘れられるよね。こんな大事な事」
別に。大事でもなんでもなくね？
「そんな事言ったって・・・・」
「もういい」
「え？」
「もういいっていってんの」
「なおみ、もういいってどういうこと？」
直美の取り巻きの一人が聞いた。
「ウチ、健一と別れるから」
「えぇ？！」
「ゆみか、あんた付き合えばいいじゃん！！」
たたたたたた・・・・・。
「え？　待ってよ直美、どこ行くの！」

仲間も慌てて後を追う。
「うわぁ・・・。まじで？　いい逃げかよ・・・。」
小声でつぶやくと、あたしはのそのそ教室に戻った。

だってほんとに忘れてただけだもん。
健一が、問い三が分からないって言ってあたしのところ来たんだもん。
それを教えただけじゃん、何が悪いの？
第一、あそこにいたメンバーあたしだけじゃないし。
れいもいたし、たかしもいたし、ちかもいたじゃん！
何であたしだけなの？何で健一だけなの？
れいもたかしも男だし、
ちかだって女だよ？
どうしてどうしてどうしてどうして！！！
はぁ・・・・・・・。
ながぁ～い、ながぁ～いため息が、口から漏れていった。

１２月１０日
健一の、メアドを教えてもらった。
健一には悪いけど、しょうがない。

『健一へ
ちゃんと送れてる？
返信ちょうだい。』

――――送信――――

十分後、返事が来た。

『健一です。
送れてるよ。
大丈夫。』

その後も、どうでもいい話をぺらぺらとした。
そろそろ本題に入らなくっちゃ。

『ところで健一に頼みがあるんだけど。』

『何？』

『直美とどうなってる？』

『何が？』

『あたしに直美が
色々言ってる事はしってるでしょ？』

『ああ。噂は聞いた事あるけど・・・。ホントなの？』

『今日、ちょっと呼び出されて・・・
もう健一と話すなって言われたんだけど。
悪いけど、健一ももうあたしに話しかけないでくれる？』

二十分の、沈黙・・・。

やっぱり怒ってるよね。
いきなりそんなこと言われたら・・・。
半ばあきらめて携帯をベットの上に放り投げた。
ポフッ、と柔らかい音を立てて携帯は予想より少し右の方に落ちた。

さらに十分たった。
もう、あたしは完全に携帯を無視して、漫画を読んでいた。

――――ブゥーン――――ブゥーン・・・。

携帯が、唸った。
ガバッと身を起こして、携帯をつかんで、液晶画面を開いた。

『新着メール　1件』

恐る恐る、メールを開いた。

『分かった』

短い、短いメールだった。
三十分もかかった割には、短すぎるメールだった。
つん、鼻の奥に少し刺激があった。
ポトッ――――。
『た』の字が、滲んだ。
みるみるうちに、画面に透明な雨粒が降ってきた。
携帯を閉じて、天井の明かりを見ながら、泣いた。

「どうして泣くの？」
心が聞いた。
「わかんない」
あたしが答えた。

だって、健一はただのクラスメートでしょ？
そうだよ。
なら、なぜ泣くの？
わかんない。
自分で言ったじゃない。健一はクラスメートだよ？
そうだよ、ただのクラスメート。れいや、たかしとおんなじ。
別に、どうってことないよ。これまでだって、自分からは話さなかったでしょ。
うん。分かってる。わかってるよ。

心と会話しているうちに、
テストの日を、思い出した。

『ｍｓ．ｙｕｍｉｋａ ｉｓ ｍｙ ｆｒｉｅｎｄ．』
『・・・ｍｒ．ｋｅｎｉｃｈｉ ｉｓ ｍｙ ｆｒｉｅｎｄ・・・ｈｅ ｉｓ ｖｅｒｙ ｋｉｎｄ．』

ね？だから、大丈夫。泣く事ないよ。ただのクラスメートでしょ？
・・・・・・・・ううん。
え？
ちがうよ。健一はクラスメートじゃない。
何言ってるの？　クラスメートだよ？
健一は・・・・健一は、友達だよ。
と・・・もだち？

そうだよ。大切な、大切な友達だよ。
・・・・・・。
その友達に、あんな事言っちゃった。
・・・・・・・。
その友達と、もう話せない。
でも！！
？
もう、無理だよ。
え？
もう、できっこない。仲直りなんて出来ないよ！！
そんなことない。出来るよ。
無理だよ。絶対。だって、健一あんなに怒ってた。
・・・・・。そう・・だね・・・・・。
ねぇ・・・。どうしよう。
どうしよう。

「どうしよう・・・・。どうしよう」
気がつくと呟いていた。
涙は、相変わらず溢れている。
鼻も、グズグズと詰まっている。

無理だよ。仲直りなんて・・・。
でも・・・。あたしは仲直りしたい。
やめた方がいいよ。絶対に無理だよ。
あたし・・・。やる。
何を？
もう一度、メールしてみる。

無理だってば！！
やるよ。残念ながら、この体を支配しているのはあたしだから。
・・・・・。
それに、やるだけやりたい。
でも、直美はどうするの？ただじゃすまない、きっと。
うん・・・。
今度はきっと、もっと怖いよきっと。
だけど、健一はあたしの友達だもん。やる。
はぁ・・・。
心のため息が聞こえた。
じゃあ、やれば？そのかわり、あたしは知らない。
わかった。

パチッと目を開けた。
眠ってしまっていたようだ。
いつのまにか、涙は止まっていた。
すでに、夜の八時になっていた。
携帯を探し出して、開く。
「健一」をあて先に設定する。

『さっきはあんなこと言ってゴメン。
怒ってるよね。でも、メールはこれまでどおりやってほしいんだ。
駄目かなぁ？
時々だったら、話したりしたいし・・・。お願い』

震える指で、やっとそれだけ打った。

――――送信――――

震える心で、ボタンを押した。
『もちろんいいよ。じゃあまた明日ね。』
そんな文面を期待していた。

二十分、三十分、一時間。
閉じた携帯を睨んでいた。

今度こそ、返事は来なかった。

１２月１１日

今日は、朝からドキドキしていた。
でも、それはそのうちしょんぼりに変わった。
やっぱり、話せないって言うのはかなり寂しい。
他の友達と話すときも、その時の笑顔も、
すべてとり繕った、にせもの。

やっぱり、昨日までの笑顔はできなかった。
健一を見ると泣きそうになるから、絶対に見ないようにした。
それでも目の端に映る健一はなんだかむすっとしていたみたいだ。

泣きたい。
思いっきり泣きたい。
話したい。
思いっきり笑いたい。

そればっかり頭の中で考えていた。

１２月１４日

するどい友達っているんだね。
とうとう言われちゃった。
「あんた、この頃健一と話してる？」
正直に答えた。笑顔を繕って。
「ううん、今日は一度も」
ほんとは今日だけじゃないんだけど。
それを言ったら、絶対に同情されて、
同情されたら、泣き出してしまうから。
だから言わない。だから言えない。
もう駄目だった。学校にいるのがつらかった。
健一とは話せないし、直美は例えば、
「健一のほうを見てた」とか
「二人で廊下を歩いてた」とか
「健一にぶつかった」とかで

いちいち責めてくる。
いや、攻めるという漢字のほうが正しいかもしれない。
毎回毎回、5，6人で攻めてくる。
疲れた。学校にいるのがつらかった。
家に帰ると、自分の部屋か、トイレにこもって泣く。
そうでもしないとやりきれなかった。
泣き終わると、顔を洗って、携帯をチェックする。
一目で分かるのに、何度も何度も、メールが来ていないかチェックする。
来ていないことが分かると、また泣く。
毎日が、その繰り返し。
「ねぇ、聞いてるの？！」
「え？　ああうん。きいてるよ」

しばらくその子と話して、適当にごまかして話を終えた。

12月15日

土曜日だ。週末は、暇だ。
暇をもてあます時は、寝てるに限る。
11時ごろまでベットの中でゴロゴロとしていた。
でも寝てばっかりだとそのうち頭が痛くなってくる。
あぁ、もう起きようか。
起きても暇をもてあます。
どうしようか？　やっぱりメールをチェックする。
わずかな希望は昨日で捨てた。
手の中で携帯を開き、液晶画面を見る。

『新着メール　3件』

ドキッとした。
心音のテンポがどんどん速くなっていく。
トクッ、トクッ、トク、トク、トク、トク、ドク、ドク、ドク・・・・。
『確認』ボタンを押す。

まず、1件目。

『いつもご利用ありがとうございます』
こんな書き出しで始まる契約してる携帯会社からのメール。
いつもはこんなの読まずに飛ばしちゃうけど、
今日はわざとゆっくりゆっくり、時間をかけて読んだ。
読み終えてから、フゥと息を吐いて、2件目。

件名は、
『オハヨウ♪』
律子からのいつものオハヨウメール。
これは、ゆっくり読むほうが難しい。
文面はいつも同じだし、暗記出来ないほど長いものじゃない。
それなりに時間をかけて、今日に限ってはちゃんと、
返信もした。
それから、3件目。

差出人を確認する。
・・・・・・『健一』。
健一・・・・・。健一からだ・・・。
開いて、ゆっくりと、一語一語を目で追って、丁寧に読んだ。

『おはよう。

返信が、遅くなってゴメン。
俺だってゆみかとメールもしたいし
話もしたい。だから、もちろんＯＫだよ。
じゃあ、直美が色々言わないように
俺も気をつけるから。メールはこれまで通りやろうな』

あぁ、健一だ・・・。
いつもの、健一だ・・・。
このごろ毎日感じてる、あのつん、とした刺激が、
また鼻を襲い、そしてまた、あの日のように液晶画面に雨が降った。

『ありがとう。
じゃあ、健一からはできるだけ話しかけないで。
あたしもそうするから。
メィルは普通にやろうねぇ～♪』

液晶画面の雨が小雨になった頃、そう打って、送信した。

１２月２１日　終業式。

二学期が、終わった。この一週間は楽しかった。
健一と話はそんなに出来なかったけど、メールは出来た。
いつもの健一だった。
話も、少しなら出来た。
嬉しかった。笑顔も、繕ったものじゃなくて、本物に戻った。
あぁ～あ。宿題多くていやだなぁ～。

１月１０日　始業式。

ねぇ、あたし、気づいたんだ。
あはははは・・・・。
今頃、遅いかなぁ・・・。
健一はやっぱりただの友達じゃないかも・・・。
あたし・・・。冬休みの間、つまらなかった。
あぁ、違うの。そういうんじゃなくて。
充実した休みだったし、友達ともたくさん遊べたよ？
でも・・・。でも、やっぱりつまらなかった。
健一に・・・。会いたかった。
メールだけじゃダメだった。
話は出来なくてもいい。健一を見たかった。
やっぱりただの友達じゃないんだ。・・・そうだよね？

今日は、やっぱり面白くはなかったよ？
でも・・・。でも健一と少しは話せたし・・・。
メールもそろそろ来るだろうし・・・。
今日は、やっぱりすごく楽しかった！　・・・かも。

１月１５日

あたしって、幸せかも。
でも、かなわない恋だけどね・・・・。
直美(ひと)の健一(かれし)だし・・・。
ははは・・・。
あたしって、バカだよねぇ～・・・・。

1月26日

あぁ、悲しめばいいのか、喜んでいいのか・・・・。
あたしにはわからない。
ただ一つはっきりしてるのは・・・
塚原健一(あのひと)が朝草直美(こいがたき)の物(かれし)じゃなくなったこと。
健一が直美を振ったらしい。
ふと気づいてみれば、あの子(なおみ)があの人(けんいち)の為に切ったあの手首。
二ヶ月経ってすっかり直っていた。
柚実夏(あたし)にとっては、最高の。
直美にとっては、最悪の。
健一にとっては・・・・。
わからないけど、最高であって欲しい。
そういう、今日はそういう日。

エピローグ

２月１４日　バレンタインデー

今日は健一にチョコを渡すんだぁ～。
そのチョコを渡した瞬間に、クラスの公式カップルになるだろう。
・・・・。そして今日は、直美に仕返しされるかもしれない日。
でも、大丈夫だと思う。直美には、健一(あのひと)が先に言っておいた。
別に今の所異常はないし・・・。直美のなかではもう、整理されているのかも。
チョコを渡して、健一が受け取った瞬間に、二人で言うんだ。
「うちら、付き合ってたんだ。節分の日から！」
いまは、塚原健一(あのひと)は柚実夏(アタシ)の人。

あたし、今、すっごく幸せ。

（後書き）

どうでしたか？
恋愛物を書き上げたのは初めてで・・・。
辛口でもかまいません。
ここまで読み終えてくださった方は感想おねがいします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4565d/

☆そういう日☆

2010年10月17日06時44分発行